

過去と、 未来の交差点で。

Plan the Future with the History.

激しく照りつける太陽の下、中国浙江省杭州市のとある歴史地区を対象としてサマースクールが開催された。サマースクールを通して捉えた地区から、保全まちづくりを考える。



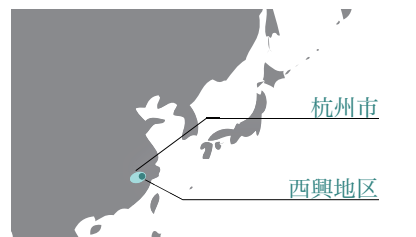
場所から学ぶ異国の保全まちづくり

Learn from Place in Xixing, Hangzhou

「Learning from place」。そう名付けられたサマースクールが8月5日から12日にかけて、中国浙江省杭州市にある浙江大学にて開催された。西村幸夫教授（神戸芸工大）をお招きし、主催者である浙江大学の修士課程の学生を中心に世界中の12大学から、専門や学年の異なる約40名の学生が集まった。学生は8人ずつ班分けされ、各班は西興歴史地区を対象として、最終日のプロポーザルの発表を目指し、調査に励んだ。

私にとってこのような国際ワークショップは初めての機会であり、英語等々苦労することも多々あったが、優秀なチームメンバーに支えられ、最終的には計画の提案を行うことができた。メンバーには感謝してもしきれないが、ここでも改めて謝意を述べたい。このページでは調査などを通じて感じたことを、ほんの一部だがレポートしたい。

text_YAMAGUCHI /M1



切り取られた西興歴史地区

The calm district before a change

西興地区は銭塘江の南側に位置する歴史地区である。地区の北部を運河が貫いており、かつて水運の中心として栄えた名残をとどめる。地区全体の景観の連続性は非常に高く、運河からさらに一歩内側に入った街路に沿って歩けば、すっかり清代の雰囲気に入ることができる。市政府により一部修景も行われたようだ。2000年代に巨大な道路が一部地区を寸断してしまったが、2016年には浙江省に歴史地区として登録された経緯がある。



▲清代に作成された地図にも西興地区の名前が

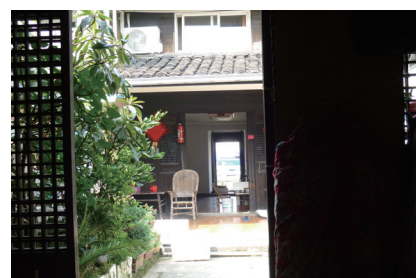
その一方で、地区が有する機能や地域住民の関係性は大きな変化を経ている。1000年以上の歴史を持つ西興地区は、今は杭州市の一部となっているがかつては蕭山の一部であり、杭州へ繋がる入り口という立地から交通の要所として、軍事拠点・水運駅の役割を果たし、特に明、清代の両時代に大いに栄えた。しかし近代化によってこれらの機能は廃れ、地区は変化を余儀なくされた。一宅地は複数の世帯で分割され、かつて数千人の商人、学者などで賑わったまちは、低所得者の住むまちへと変化した。その理由の一つが、脆弱なインフラである。ほとんどの家はエアコンもトイレも無い。このような状況も今の地区を構成する一要因であるといえるが、確実に地区再編の時間が近づいている。いかに地区の独自性を残しつつも生活水準を向上させるかは重大な課題である。

西興地区の向かう未来は不透明だ。今のまま住宅地として維持していくのか？それとも杭州市のほか地区の様に観光地化するのか？市政府も方針を決めあぐねているという。都市再編はジェントリフィケーションを引き起こし、地区を不可逆に破壊する可能性をはらむ。どちらにせよ、街路を歩き両側の家々を覗いた時に、頬に風と生活を感じられるのは今だけの経験となりそうだ。

西興地区を歩いていると、至る所で遺構などを示す看板を見かけるが、地元の人は「フェイク」であると言う。では、本物はどこにあるのかというところ地下に埋まってしまうのだとか。この話がどこまで本当か確認することは出来なかったが、清時代の文献に記載されていた石柱が保護、注目されることなく街角にぼつりとたっていたりする。歴史はどの瞬間から歴史となるのか。何を守るべきなのだろうか。このフェイクも、数世紀後には、当時の歴史を反映する遺跡として保全すべき対象として残っているのだろうか。歴史地区といえども、何を維持して何を変えるか、取捨選択しなくてはならず、何も今のまま変化せずに残すことは出来ない。誰の何のための保全なのか、常に問い続けられていたように感じる。



▲雲一つない青空の下は、37度を超える猛暑



▲エアコンがないため、ドアを開けて生活する



▲作業中の風景。皆さんお疲れさまでした！！

中島先生の 10 年間、ここにあり

The book tells us this 10 years of Mr. Nakajima.

text_OKAYAMA /M2

今月 9 日に中島准教授著作の『都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート』が出版されました。出版への思いや内容について中島先生からメッセージをいただきました。また中島先生が杭州ワークショップで「都市の物語」について語った講演内容を岡山がレポートする。



中島先生からのメッセージ

この 8 月に『都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート』を出版しました。私にとっては、『都市美運動』以来、約 10 年ぶりの二冊目の単著です。主にこれまでに書き溜めてきた日本の都市計画史関連のテキストをまとめた一冊ですが、その編集作業に 2 年もかかりました。この本はようやく生まれてきてくれた我が子のように、今はひたすら可愛いです。特に今回、田中和人氏の作品（「C.I.T.Y.」というシリーズの一作）を装画に、川添英昭氏がデザインしてくださった鮮やかな装丁が自慢です（もちろん中身も自信あり…）。おそらくインテリアとしても活用できるお得な一冊です。ぜひ、学生、OB OG の皆様、ご笑覧下さい。ただ、実は私の気持ちはすでに次の書籍の構想に向かっています。断片的なノートから体系的な通史へ、学部で行っている講義「都市計画史」をもとに、新しい都市計画通史（勝手

な仮題は『都市と都市計画家たち 日本近現代都市計画史講義』を 40 代半ばまでにまとめたと思っています（本日が誕生日で、42 歳になりました）。[2018 年 8 月 21 日 寄稿]



都市工図書館の新刊コーナーに目をやると早速すでに借りられていた。SNS などでも様々な方が感想を述べている

都市計画の思想と場所

日本近現代都市計画史ノート

：従来の制度史や空間史を超えて、思想と場所という視点から、都市計画史研究の歴史的展開を後付け、今後の行方を構想する。そして社会的な総体に関心を広げ、都市の実態により接近し、社会との接点を柔軟に模索するための「開かれた都市計画史」を多様な主題から探求する。（東京大学出版社より引用）

都市の物語を見つめる

中島先生の杭州での講演を振り返ってみる。テーマは「都市の物語」だった。千野帽子『人はなぜものごとをを求めるのか』の引用から始まり、東京のとある道路の物語、三菱一号館などの伝統的建造物の保全に関する物語へと続いた。道路の話題では非常に考現学的に細部を見つめつつも都市の制度や町全体のストーリーへと展開していく点が面白かった。建造物の保全に対する問いでは、オーセンティシティを追うだけでなく変容してきた過程に目を向け数十年前という近い過去の価値に触れた内容だった。

そして毎回思うのだが中島先生の引用先はいつも面白い。今回は都市計画と異なる分野の引用が使われており、新刊の中でもポップ・ディランの話題が出てくる。

非常に生意気ながら私は中島先生が大好きである。我が道をゆく、都市計画 Rocker だと思っている。40 代の中島先生からも目が離せない。



中島先生の杭州ワークショップ中の活躍

Information



Hey listen, -ちょっと聞いて！

8.26 吉田の火祭りにいきました



日本三大奇祭にも数えられる吉田の火祭り。祭りの雰囲気を楽しみつつ、ヒアリングを通して非日常のまちを調査しました。(M1 藤原)

上野 PJ シンポジウム準備など



10 月 1 日に開催するシンポジウムの準備のため、調査を行っています。夜の吉田の魅力を探るため、「夜のまちあるき + プナ打ち上げ」を何度か行いました。(M2 新妻)

8.12 内子シンポジウムと提案準備



10 月 14 日のシンポジウムに向けて準備中です。9 月は現地調査も行うので Web マガをお楽しみに。また内子産のぶどうを戴きました。ありがとうございました。(M1 山口) 進路への第一歩



M2 岡山が 10 月より 1 年間休学します。主に株式会社 TIT の所員として内子町の歴史計画や新設ホテルの基本計画の策定に取り組めます。精一杯頑張ります！(M2 岡山)

夏休みに入り都市デザイン研究室のメンバーは全国 & 世界に飛び出し奮闘中です。インターンシップ、調査、企画展、シンポジウム、...、目白押しです！

8 月の Web マガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



8.1-3 行灯 WS& 駐車場社会実験



8.12-13 浦安よみとき展示会

the Other...

8.22-26 カトマンズ集落調査

9 月の予定

Lab Meeting

夏休みのため、会議はありません。

1st (Sat.)	県立三国高校文化祭 + 帯のまち流し
4-6th	建築学会 @ 東北大
8th-9th	高島平グリーンテラス
10th (Mon.)	内子歴史まち協議会、内子現地調査
28th (Fri.)	鶴川駅コンペ決切

✧ 編集後記

今回のサマースクールでは 8.5 日杭州にいたが、最終日に 30 分ほどしか観光できず。「上有天堂、下有蘇杭（天に極楽が有り、地上に蘇州・杭州有り）」と謳われる西湖観光だけは死守したが、冬の美しさを説かれ杭州再訪問を杭州滞在時に決意。西湖周囲でも多くの施設が建設途中で、今回この旅で見たまち達は次回来るときも同じまちとして感じられるのだろうか、と考えながら中国を去った。杭州があまりにも暑かったので東京の残暑がぬるく感じるこの頃。(M1 山口)